



TITLE:

# Complex Leech lattice と Sporadic Suzuki group(有限群論)

AUTHOR(S):

吉荒, 聡

---

CITATION:

吉荒, 聡. Complex Leech lattice と Sporadic Suzuki group(有限群論). 数理解析研究所講究録 1982, 475: 26-46

ISSUE DATE:

1982-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/103305>

RIGHT:

# Complex Leech lattice と Sporadic Suzuki group

東大 理学部 吉 荒 聡

( Satoshi Yoshikawa )

## §1 単純群の極大部分群分類問題

有限群のうちで essential な存在である有限単純群に関する様々な疑問—どの位存在するか, どんな部分群構造を持つか—等は有限群論の重要な推進力のひとつであった。有限単純群の分類が完成された今日, その部分群構造の決定は残された重要課題のひとつであろう。すなわち, 与えられた有限単純群を含む部分群, それらの交わり等, 等々を調べる必要がある。前者は次の問題(\*)に帰着される。

(\*) 与えられた有限単純群  $G$  に対し,  $G$  の極大部分群の共役類の完全代表系を求める。

(\*) はごく自然な問題ゆえ, 群論創始以来数多くの研究がなされている。

$L_2(8)$  : Dickson [8]

$L_3(8), U_3(8)$  ; Bloom [1], Hartley [13], Mitchell [7]

$Sz(8)$  : Suzuki [21]

$Sp_4(8)$  ;  $q$ =odd Mitchell [18] ,  $q$ =even Muene [19]

$G_2(4)$  ; Butler [3] , Peterson-Tchakerian [20] , Wilson [24]

$G_2(8)$  ;  $q$ =even Cooperstein [6] ,

${}^2F_4(2)'$  : Tchakerian [22]

$L_4(8)$  :  $q$ =even Muene [19]

Mathieu 群  $M_{11}, M_{12}, M_{22}, M_{23}, M_{24}$

Chang-Choi および Conway [5]

$HS$  : Maglovers [16]

$J_1$  : Janke [14]

$J_2, J_3$  : Finkelstein - Rudvalis [12] , [11]

$M^c, \cdot 3$  : Finkelstein [10]

$He$  : Butler [2]

筆者は sporadic simple group  $Suz$  に対する問題(\*) を考え次の結論を得た。[26]

Theorem  $Suz$  の 極大部分群 の 共役類分割の完全代表系は 次のリストに含まれる。

$2^{1+6} \cdot U_4(2)$  ,  $2^{2+8} \rtimes (A_5 \times \Sigma_3)$  ,  $2^{4+6} \rtimes Z_3 \cdot A_6$  ,

$Z_3 \cdot U_4(3) \cdot Z_2$  ,  $3^{2+4} \rtimes Z_2(A_4 \times E_4) \cdot Z_2$  ,  $3^6 \rtimes M_{11}$  ,

$(2^2 \times L_3(4)) \cdot \Sigma_3$  ,  $(3^2 \times A_6) \cdot Q_8$

$(A_5 \times A_6) \cdot Z_2$  ,  $M_{12} \cdot Z_2$  ,  $J_2 \cdot Z_2$  ,  $U_5(2)$  ,  $G_2(4)$  ,

\*  $L_3(3)$ ,  $Z_2$  (2-classer), \*  $L_2(25)$ , \*  $A_7$

このうち \* EPのもの以外は確かに存在する。

Notation 上記において,  $p^n$  は order  $p^n$  の elementary abelian group,  $Z_m$  は order  $m$  の cyclic group,  $p^{a+b}$  は  $P' \cong P^a$ ,  $P/P' \cong P^b$  なる special group,  $2^{1+b}$  は negative type の extra special 2-group (order  $2^7$ ) とあるもの,  $\Sigma_n$ ,  $A_n$  は  $n$  次 対称, 交代群,  $Q_8$  は order 8 の quaternion group.

注意: Wilson は Computer を用いて 上記の3つの \* EP の subgroup の存在を示した。[24]

筆者の知る所では, 次の単純群についても右記の人々が問題(\*) と考察中 ないしは 解決した由である。

$Suz$	Wilson [24], Yoshida [26]	決定
・1	Curtis [7] + Wilson [25]	決定
・2	Wilson	(多分決定)
$G_2(8)$	$q = \text{odd}$ Ed Migliore	(多分)決定
${}^2F_4(2^{2m+1})$	John Sarle	
$Ly$	Andrew Waldman	
$O'N$	Yoshida	Maximal local は決定

なお, Fischer の群  $F_{22}$ ,  $F_{23}$  については特別な形の subgroup のリストが存在する。(Enright [9])

以下、本稿では Complex Leech lattice 及び その自己同型群の factor group としての sporadic Suzuki group の定義 (§2) より始め、その基本的性質を幾つか紹介する。 (§3) §3 の内容は大体においては新しいものではないが、ここに述べる形で書かれたことは無いので (Complex Leech lattice を扱った論文としては Lindsey [15] が唯一のものである。) "Complex Leech lattice  $\Lambda$ " の意味を込めて、まとめしておく。(証明等詳細には [27] を見よ。)

§4 では §3 で準備した Complex Leech lattice の解析を通じて得られる 顕著な 3-local group の幾つかを記述する。

なお、§3 で見るように Complex Leech lattice の係数制限は Real Leech lattice として良く知られたものであるが (例えば Conway [5]) Complex Leech lattice 自身がある  $\mathbb{Q}(i, j, k)^6$  の  $\mathbb{Z}[i, j, k, \frac{1}{2}(1+i+j+k)]$ -module の係数制限となっている。(ここで  $\mathbb{Q}(i, j, k)$  は  $\mathbb{Q}$  上の 4 元数環。) この module  $\hat{\Lambda}$  (Quaternionic Leech lattice とよぶ) に対応する群は  $G_2(4)$  であり、 $\hat{\Lambda}$  を通じて  $G_2(4)$  の諸性質を解明すると共に、 $G_2(4) \subseteq S_3$  となるから、 $S_3$  自身の subgroup の構造決定にも深くかかわってくる。この辺の事情の詳しい解説は Wilson [23] または [28] を参照されたい。

## § 2 基本概念の定義

### Notation

$\Omega := \mathbb{F}_{11}$  上の projective line  $= \{\infty, 0, 1, \dots, 10\}$

$Q := \mathbb{F}_{11}$  の平方元  $= \{x^2 \mid x \in \mathbb{F}_{11}\}$

$N := \Omega - Q$

$i \in \mathbb{F}_{11} = \{0, \dots, 10\}$  に対して  $N_i := \{n-i \mid n \in N\}$

$Q_i := \{q-i \mid q \in Q\}$ ;  $N_\infty := \Omega$  とおく。

$\mathbb{F}_3$  成分の 14 行 12 列 vector 全体 のなす空間を  $\mathbb{F}_3^{12}$  と書き, natural basis を  $\Omega$  の index 付け

$\{e_\infty, e_0, \dots, e_{10}\}$  とする。  $\mathbb{F}_3^{12} \ni X = \sum_{i=\infty}^{10} x_i e_i$  と

$(x_i)_{i=\infty}^{10}$  と書き,  $\{i \in \Omega \mid x_i \neq 0\}$  を  $X$  の support,

$\{i \in \Omega \mid x_i = 1\}$  を  $X$  の positive support, support の 濃度 を

Weight とよぶ。 また  $X \subseteq \Omega$  に対して  $\sum_{x \in X} e_x$  のことを,  $e_X$  と略記する。

(定義 1.)  $C_\infty := e_\Omega = (1, \dots, 1)$

$C_i := e_{N_i} - e_{Q_0} = (\underbrace{1}_{N_i}, \underbrace{(-1)}_{Q_i}) \quad (i \in \mathbb{F}_{11})$

とおくとき, これらの張る  $\mathbb{F}_3^{12}$  の subspace

$\mathcal{C} := \langle C_\infty, C_0, \dots, C_{10} \rangle$  を ternary Golay code とよび,

$\{\sigma := (e_\infty, \dots, e_{10})$  に属する単項行列  $\mid \mathcal{C}^\sigma = \mathcal{C}\}$

を  $\mathcal{C}$  の 自己同型群 と呼び  $\text{Aut } \mathcal{C}$  と記す。

次に、複素数体  $\mathbb{C}$  における 1 の原始 3 乗根  $\omega = -1 + \sqrt{-3}/2$  とし、 $\theta = \sqrt{-3}$  とおく。  $\mathbb{Z}$  に  $\omega$  を追加した ring  $\mathbb{Z}[\omega] = \{ \frac{1}{2}(a + b\theta) \mid a, b \in \mathbb{Z}, a \equiv b \pmod{2} \} \subseteq R$  とおく。

$\theta R$  は  $R$  の ideal であり  $R/\theta R \cong \mathbb{F}_3$ , この代表系として  $\{0, \pm 1\}$  がとれる。

今、3 元体  $\mathbb{F}_3 \cong \mathbb{Z}/3\mathbb{Z}$  を代表系  $\{0, \pm 1\}$  と同一視して  $\mathbb{Z}$  の subset と見なし、 $\mathbb{F}_3^{12} \subseteq \mathbb{Z}^{12}$  (整数成分の 1 行 12 列ベクトルの全体)  $\subseteq R^{12}$  ( $R$  成分の 1 行 12 列ベクトルの全体) を  $R$ -module とみる。この同一視のもとで、

(定義 2.) 次の  $R^{12}$  の subset を Complex Leech lattice とよび  $\mathcal{L}$  とあらわす。

$$\left\{ \begin{array}{l} \mathbf{0} + \theta \mathbf{C} + 3\mathbf{X} \\ \mathbf{1} + \theta \mathbf{C} + 3\mathbf{Y} \\ -\mathbf{1} + \theta \mathbf{C} + 3\mathbf{Z} \end{array} \middle| \begin{array}{l} \mathbf{X} = (x_i), \mathbf{Y} = (y_i), \mathbf{Z} = (z_i) \in R^{12} \\ \sum_{i=1}^{12} x_i \equiv 0, \sum_{i=1}^{12} y_i \equiv 1, \sum_{i=1}^{12} z_i \equiv -1 \pmod{\theta} \\ \mathbf{C} \in \mathbb{C} \end{array} \right\}$$

$$\text{と } \mathbf{1} = (1, \dots, 1)$$

また  $\{ \sigma : \mathbb{Q}(\omega) \text{ 成分の } 12 \text{ 次ユニタリ行列} \mid \mathcal{L}^\sigma = \mathcal{L} \}$  を  $\mathcal{L}$  の 自己同型群 とよび、これを  $\text{Aut } \mathcal{L} = \tilde{G}$  と書く。

$\mathcal{L}$  は  $R^{12}$  の lattice ; 有限生成  $R$ -module であり、

$\mathbb{Q}(\omega) \cdot \mathcal{L} = \mathbb{Q}(\omega)^{12}$  ; が示される。また order 6 のスカ

ラ行列  $-\omega I \in \tilde{G} = \text{Aut } \mathcal{L}$  は明らかであるが、factor group

$\tilde{G}/\langle -\omega I \rangle =: G$  は simple group である事を示される。

$G = \text{Aut}/\Lambda / \langle -\omega I \rangle$  と Sporadic Suzuki group と呼ぶ。

以下,  $G$  の基本的性質の幾つかと, その為に必要な ternary Golay code  $\mathcal{C}$ , complex Leech lattice  $\Lambda$  なるものに  $\text{Aut } \mathcal{C}$ ,  $\text{Aut } \Lambda$  の幾つかの性質と証明なしに述べる。

(証明等詳しくは [27] と参照)

### §3 諸性質

(1) ternary Golay code  $\mathcal{C}$  と,  $M_{11}$  の 12 点置換表現.

ternary Golay code  $\mathcal{C}$  は次の  $3^6 = 729$  個のベクトルから成る。

Weight	形式	positive support	個数
0	$\emptyset$	$\emptyset$	1
6	① $\pm \mathcal{C}_i + \mathcal{C}_\infty = \pm(1^6, 0^6)$ ② $\pm \mathcal{C}_i - \mathcal{C}_\infty = \pm(1^6, 0^6)$ ③ $\pm \mathcal{C}_i \pm \mathcal{C}_j = \begin{pmatrix} 1^3, -1^3, 0^6 \end{pmatrix}$ <sup><math>\{a, b, c\}</math></sup>	$N_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$ $Q_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$ $\Omega$ の任意の 3 点 $a, b, c$	$11 \times 2$ $11 \times 2$ $\binom{12}{3}$
9	① $\pm \mathcal{C}_i \pm \mathcal{C}_j + \mathcal{C}_\infty = \begin{pmatrix} -1^3, 0^3, 1^6 \end{pmatrix}$ <sup><math>\{a, b, c\}</math></sup> ② ① の negative.	$\Omega$ の任意の 3 点 $a, b, c$	$\binom{12}{3}$ $\binom{12}{3}$
12	① $\pm \mathcal{C}_i = \pm(1^6, -1^6)$ ② $\mathcal{C}_\infty$ , ③ $-\mathcal{C}_\infty$	$N_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$ $\Omega$	$11 \times 2$ $1 \times 2$

$\mathcal{C}$  の weight  $n$  のベクトル全体を  $\mathcal{C}_n$  と書く。  $\text{Aut } \mathcal{C}$  の元は



単項行列ゆえ,  $\Gamma$  の weight を変えぬ。従って  $\text{Aut } \mathcal{C}$  は  $\mathcal{C}_0, \mathcal{C}_6, \mathcal{C}_9, \mathcal{C}_{12}$  上に作用するが, これらはすべて transitive となる。

特に  $\text{Aut } \mathcal{C}$  は 24 変集合  $\mathcal{C}_{12} = \{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$  上に transitive に作用し, 従ってその符号を無視して得られる 12 個の pair のなす  $\mathcal{C} := \{\pm \mathcal{C}_0 \mid i \in \Omega\}$  上にも transitive に作用する。

一方, 単項行列のなす群として  $\text{Aut } \mathcal{C}$  は 24 変集合  $\{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$  上, 従って 12 個の pair  $E := \{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$  上に (transitive に) 作用する。

$E$  および  $\mathcal{C}$  への作用の核は  $\langle -I \rangle$  であり,  $M := \text{Aut } \mathcal{C} / \langle -I \rangle$  とおけば  $(M, E)$  は単項行列が  $\Omega$  上にひきおとす自然な置換群であり,  $(M_{12}, \text{natural な } 12 \text{ 変})$  と置換群として同型である事が示される。(  $M_{12}$  は 12 次 Mathieu 群 )

もうひとつの 12 変集合  $\mathcal{C}$  上の置換表現  $(M, \mathcal{C})$  は, 上の  $M \cong M_{12}$  の自然表現とは同値にならない。実際,  $(M, \mathcal{C})$  の 1 変  $\pm \mathcal{C}_0$  の stabilizer は,  $\text{Aut } \mathcal{C}$  の中の置換行列全体のなす群  $D$  と同型で,  $E$  上の遷移となる事が示される。

この  $\text{Aut } \mathcal{C}$  の permutation part  $D$  は, 抽象群としては,  $(M_{12}, E)$  の 1 変の stabilizer  $M_{11}$  (11 次 Mathieu 群) と同型となる事が示されるので,  $(D, \mathcal{C})$  は  $M_{11}$  の 12 変置換表現を与える。

$D$  の  $\mathcal{C}$  への作用により, 次の表  $\Gamma, \mathcal{C}_6$  の ①, ②, ③;  $\mathcal{C}_9$  の ①, ②;

$C_{12}$  の  $\mathbb{D}$ ,  $\mathbb{C}\alpha$ ,  $-\mathbb{C}\alpha$  はそれぞれ  $P$ -orbit となる。

(2) Complex Leech lattice  $\mathcal{L}$ ;  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  および cross.

$X \in \mathcal{L}$  に対し,  $g(X) = \frac{2}{9} \sum_{i=-\infty}^{\infty} |x_i|^2$  ( $X = (x_i)_{i=-\infty}^{\infty}$ ;  $|x_i|^2 = x_i \overline{x_i}$ ;  $\overline{x_i}$  は  $x_i$  の複素共役) とおいて二次形式  $g$  を定義すれば,  $g(X)$  は even integer で,  $g(X) = 2$  とみたす  $X \in \mathcal{L}$  は存在しない。すなわち,  $R$ -module  $\mathcal{L}$  を  $\mathbb{Z}$ -module とみなして得られる  $\mathbb{Q}^{24}$  の lattice  $\mathcal{L}/\mathbb{Z}$  は  $g$  より導かれる二次形式  $g'$  に対し, even lattice かつ  $g'(X) = 2 \forall X \in \mathcal{L}/\mathbb{Z}$  と持たぬが, 更に  $\mathcal{L}/\mathbb{Z}$  は unimodular (i.e.  $g'$  is associate する双一次形式  $\varepsilon_{g'}$  と書(とき  $\mathcal{L}/\mathbb{Z} = \{X \in \mathbb{Q}^{24} \mid \varepsilon_{g'}(X, Y) \in \mathbb{Z} (\forall Y \in \mathcal{L}/\mathbb{Z})\}$ ) である事もわかる。従って, Conway [4] により  $\mathcal{L}/\mathbb{Z} \cong \text{Real Leech lattice}$  となる。これは  $\mathcal{L}$  を complex Leech lattice と呼ぶ事の正当化である。

$\mathcal{L}_n := \{X \in \mathcal{L} \mid g(X) = 2n\}$  ( $n = 0, 1, 2, \dots$ ) とおく。  
 $\mathcal{L}_0 = \{0\}$ , 上の注意から  $\mathcal{L}_1 = \emptyset$ . 恒等計算により,  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の vector の個数と形が求められる。

$$|\mathcal{L}_2| = 196,560, \quad |\mathcal{L}_3| = 16,773,120.$$

(定義 3.)  $R$ -module  $\mathcal{L}$  の submodule  $\theta\mathcal{L} = \{\theta X \mid X \in \mathcal{L}\}$  による factor module  $\overline{\mathcal{L}} = \mathcal{L}/\theta\mathcal{L} = \{X + \theta\mathcal{L} \mid X \in \mathcal{L}\}$  を  $\mathcal{L}$  の mod  $\theta$  の reduction とよぶ。 $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の natural projection  $p: \mathcal{L} \rightarrow \overline{\mathcal{L}}$  による image を  $\overline{\mathcal{L}}_2, \overline{\mathcal{L}}_3$  と書く。

一般に,  $X \in \mathcal{L}$  に対して,  $p(X) = p(\omega X) = p(\bar{\omega} X)$  及び  $X \neq 0$  ならば  $p(X) \neq p(-X)$  である事に注意する。

次の重要な lemma が示される。

lemma.  $\overline{\mathcal{L}} = \{0\} + \overline{\mathcal{L}}_2 + \overline{\mathcal{L}}_3$  と分解される。

また,  $p$  は  $\mathcal{L}_2$  上 3 対 1,  $\mathcal{L}_3$  上 3・12 対 1 の map.

$\overline{X} \in \overline{\mathcal{L}}_2$  ( $X \in \mathcal{L}_2$ ) に対し  $p^{-1}(\overline{X}) = \langle \omega \rangle X = \{X, \omega X, \bar{\omega} X\}$ .

$\overline{X} \in \overline{\mathcal{L}}_3$  ( $X \in \mathcal{L}_3$ ) に対し,  $X = X_1$  と含む  $\mathcal{L}_3$  の 12 個の vector  $\{X_1, X_2, \dots, X_{12}\}$  で,  $p^{-1}(\overline{X}) = \{\langle \omega \rangle X_1, \langle \omega \rangle X_2, \dots, \langle \omega \rangle X_{12}\}$  とみたすものが unique に存在する。また  $\delta$  に付随する双一次形式  $h$  に関し,  $X_i, X_j$  ( $1 \leq i \neq j \leq 12$ ) は直交する。

例えば,  $\forall i \in \Omega$  に対し  $\mathcal{S}_0 := (\overset{c}{3}\overset{c}{0}, 0'')$  とおけば

$\mathcal{S}_0 = 0 + \theta \cdot 0 + 3(\overset{c}{0}, 0'') \in \mathcal{L}$  であり,  $h(\mathcal{S}_i, \mathcal{S}_j) = 0$  ( $i \neq j$ )。また,

$$\mathcal{S}_i - \mathcal{S}_j = \theta(\overset{c}{3}, \overset{j}{-3}, 0'')$$

$$(\overset{c}{3}, \overset{j}{-3}, 0'') = 0 + \theta \cdot 0 + 3(\overset{c}{1}, \overset{j}{-1}, 0'') \in \mathcal{L} \text{ 也}$$

$$\mathcal{S}_i - \mathcal{S}_j \in \theta \mathcal{L}. \quad \text{i.e. } p(\mathcal{S}_i) = p(\mathcal{S}_j).$$

従って, lemma から  $p^{-1}(\overline{\mathcal{S}}_\alpha) = \{\langle \omega \rangle \mathcal{S}_\alpha, \langle \omega \rangle \mathcal{S}_0, \dots, \langle \omega \rangle \mathcal{S}_{10}\}$

この  $\{\mathcal{S}_\alpha, \mathcal{S}_0, \dots, \mathcal{S}_{10}\}$  は  $\mathcal{L}$  における直交座標軸の集合とも

いふべき自然な対象である。そこで,

(定義 4.)  $\mathcal{L}_3$  の 12 個のベクトル  $X_1, \dots, X_{12}$  が

$$(1) \quad h(X_i, X_j) = 0 \quad (1 \leq i \neq j \leq 12)$$

$$(2) \quad X_i - X_j \in \theta \mathcal{L} \quad (1 \leq i, j \leq 12)$$

とみえるとき, 12個の rank 1 の  $R$ -submodules のなす unordered set  $\{R\chi_1, R\chi_2, \dots, R\chi_{12}\}$  を cross とよび, 各  $R\chi_i$  を axis と呼ぶ。

lemma から, 任意の  $\chi \in \Lambda_3$  に対し  $\chi$  を含む cross は unique に存在する。例えば 先の  $S_\infty = (\overset{\infty}{3}\bar{0}, 0'')$  を含む unique cross は  $\{R\chi_6, R\chi_8, \dots, R\chi_{10}\}$  である。この cross を Standard cross とよび,  $S'$  である。

$\Lambda$  の cross の全体を  $\mathcal{J}$  と書くと,  $\Lambda_3 \ni p(\chi_1), -p(\chi_1) \mapsto \{R\chi_1, \dots, R\chi_{12}\} (\chi_1 \text{ は含む unique cross}) \in \mathcal{J}$  により,  $|\mathcal{J}| = |\Lambda_3|/2 = 29 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13$  である。

(3) Monomial subgroup, 行列  $\Sigma$ ,  $Q$  の order と simplicity.

以後  $\Lambda_2, \Lambda_3$  のかわりに, その符号を無視した pair である集合  $\{\pm \chi \mid \chi \in \Lambda_2\}$  等と考へ, これも同じく  $\Lambda_2, \Lambda_3$  と書く。  $\text{Aut } \Lambda$  の元はユニタリ行列ゆえ,  $\chi$  を保つから  $\Lambda_2, \Lambda_3$  に作用する。  $O/\Lambda$  も不変にするから, 本来の意味での  $\Lambda_2, \Lambda_3$  だけでなく, その符号を無視した  $\Lambda_2, \Lambda_3$  上にも作用する。この核は  $\langle -\omega I \rangle$  であり,  $Q = \tilde{Q}/\langle -\omega I \rangle$  は  $\Lambda_2, \Lambda_3$  上 faithful に作用。

$\Lambda_3$  の 12 元  $\{\pm p(\chi_6)\}$  をとれば,  $Q$  におけるこの 2 元 set の stabilizer は,  $\text{Aut } \Lambda$  における standard cross  $S'$  の stabilizer  $M$  の image  $\bar{M} (\subseteq Q)$  である。  $M$  および  $\bar{M} = M/\langle -\omega I \rangle$  を monomial subgroup とよぶ。

$$M = \left\{ \alpha \in \text{Aut } \mathcal{L} \mid \forall i \in \Omega \text{ に対し, } \exists j \in \Omega \text{ として } (R\mathcal{S}_i)^\sigma = R\mathcal{S}_j \right\}$$

である。  $\text{Aut } \mathcal{L}$  は  $\mathcal{S}$  を保つから、  $\mathbb{Z}[\omega] = R$  の unit group  $\langle -\omega \rangle \cong \mathbb{Z}_2 \leq U$  と書くとき、  $\mathcal{S}_i^\sigma \in R\mathcal{S}_j \cap \mathcal{L}_3 = U\mathcal{S}_j$ 。

よって、  $M$  は  $U$  成分の単項行列となる。

$\mathcal{L}$  の定義から、  $\mathcal{S}$  の各 axis をすべて fix する  $M$  の subgroup  $D_0$  は、  $D_0 = \langle -I \rangle \times D$ 、ここでアーベル群として  $D \cong \mathbb{C}$  (ternary Galois code) という構造を持つ事がわかる。

$\mathbb{C} \ni \mathbb{C}$  に対し、行列  $d(\mathbb{C}) \in D$  と、次の  $d(\mathbb{C}_i) \in (\mathbb{Z}, \mathbb{Z})$

$$d(\mathbb{C}_i) = \omega^{\mathbb{C}_i} = \begin{cases} 1 & \text{if } \mathbb{C}_i = 0 \\ \omega & \mathbb{C}_i = 1 \\ \bar{\omega} & \mathbb{C}_i = -1 \end{cases}$$

成分とする対角行列として定義すれば、  $\mathbb{C} \mapsto d(\mathbb{C})$  が上の同型  $D \cong \mathbb{C}$  を与える。

また  $\text{Aut } \mathcal{L}$  の元は  $\mathcal{L}$  上への  $\omega \in R$  の作用 (これは  $D$  の元  $\omega I = (\omega, \dots, \omega)$  従って上の対応を通じて  $(1, \dots, 1) = \mathbb{C}_0$  なる  $\mathbb{C}$  のベクトルと対応) と可換ゆえ、  $\text{Aut } \mathbb{C}$  における  $\mathbb{C}_\infty$  の stabilizer  $P \cong M_{11}$  ( $\text{Aut } \mathbb{C}$  の permutation part) に対応する置換群 (これも同じく  $P$  であらう) が  $M \leq \text{Aut } \mathcal{L}$  中にあるわかる。

実は、  $M = \langle -I \rangle \times (D_0 \rtimes P)$  である。  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の  $M$ -orbit 分解を慎重に計算すると次の表の如くである。

$\Lambda_2$		
代表元 $X = (x_i)$	$\{ x_1 ^2, \dots,  x_{10} ^2\}$	orbit の 濃度
(1) $(\theta^6, 0^6)$	$\{3^6, 0^6\}$	$22 \cdot 3^5 \cdot 2$
(2) $(\theta^3, (-\theta)^3; 0^6)$	$\{3^6, 0^6\}$	$110 \cdot 3^5 \cdot 2$
(3) $(\overset{\infty}{3}, -\overset{\infty}{3}, 0^{10})$	$\{9^2, 0^{10}\}$	$3^2 \cdot 11 \cdot 12$
(4) $(-\overset{\infty}{2}, -\overset{\infty}{2}, 1^{10})$	$\{4^2, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot (1^2)$
(5) $(-\overset{\infty}{2} + \theta, \bar{\omega}^5; 1^6)$	$\{7, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$
(6) $(-\overset{\infty}{2} - \theta, \omega^5; 1^6)$	$\{7, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$
$\Lambda_3$ $\omega \neq 1, T_1 = \{\infty, 6, 7\}, T_4 = \{0, 4, 3\}$	$T_2 = \{8, 10, 2\}, T_3 = \{1, 9, 5\}$	
(1) $(\theta^3, \theta^6, 0^3)$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 5 \cdot 11$
(2) $(\theta, \theta\omega, \theta\bar{\omega}; (-\theta)^6, 0^3)$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^4 \cdot 3^7 \cdot 5 \cdot 11$
(3) $(\omega\theta, \theta, \theta; -\omega\theta, -\theta, -\theta; (-\theta)^3, 0^3)$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^4 \cdot 3^6 \cdot 5 \cdot 11$
(4) $(\bar{\omega}, \theta^5; \overset{\infty}{3}, 0^5)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^3 \cdot 3^3 \cdot 11$
(5) $(\bar{\omega}, 0^5; -3, 0^5)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^3 \cdot 3^3 \cdot 11$
(6) $(\bar{\omega}, \theta^2, \overset{\infty}{3}, 0^5; (-\theta)^3)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^4 \cdot 3^3 \cdot 5 \cdot 11$
(7) $(3^3, 0^9)$	$\{9^3, 0^9\}$	$2 \cdot 3^3 \cdot (1^2)$
(8) $(\theta^6; -2\bar{\omega}\theta, 0^5)$	$\{12, 3^5, 0^6\}$	$2 \cdot 3^5 \cdot 22 \cdot 6$
(9) $(\theta^3, (-\theta)^3, -2\bar{\omega}\theta, 0^5)$	$\{12, 3^5, 0^6\}$	$2 \cdot 3^5 \cdot 110 \cdot 6$
(10) $(\overset{\infty}{3}\theta, 0^{11})$	$\{27, 0^{11}\}$	$12 \cdot 6$
(11) $(\overset{\infty}{1}, (-2)^5, 0^6)$	$\{4^5, 1^7\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 132$
(12) $(\overset{\infty}{1}, (-2)^2, (-2)^3, 1^3)$	$\{4^5, 1^7\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 6 \cdot 110$

代表元 $X = (X_0)$	$\{ X_{\omega} ^2, \dots,  X_{10} ^2\}$	orbitの濃度
(13) $(\underbrace{-2+\theta}_{T_1}, \underbrace{\bar{\omega}^2}_{T_2}, \underbrace{(-2\bar{\omega})^3}_{T_2}, 16)$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(14) $(\underbrace{-2+\theta}_{T_1}, \underbrace{\bar{\omega}^2}_{T_1}, 16, \underbrace{(-2\bar{\omega})^3}_{T_4})$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^2 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(15) $(\underbrace{-2-\theta}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_2}, \underbrace{(-2\omega)^3}_{T_2}, 16)$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(16) $(\underbrace{-2-\theta}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_1}, 16, \underbrace{(-2\bar{\omega})^3}_{T_4})$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(17) $(\underbrace{(-2+\theta)^2}_{N}, \underbrace{(\bar{\omega})^4}_{N}, \underbrace{-\frac{0}{2}}_{N}, 1^5)$	$\{7^2, 4, 1^9\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 660$
(18) $(\underbrace{(-2-\theta)^2}_{N}, \underbrace{\omega^4}_{N}, \underbrace{-\frac{0}{2}}_{N}, 1^5)$	$\{7^2, 4, 1^9\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 660$
(19) $(\underbrace{-2+\theta}_{T_1}, \underbrace{\bar{\omega}^2}_{T_1}, \underbrace{-\frac{0}{2}}_{T_1}, 1^5, \underbrace{-\frac{0}{2}-\theta}_{T_4}, \underbrace{\omega^3}_{T_4})$	$\{7^2, 4, 1^9\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 110$
(20) $(\underbrace{1+2\theta}_{N}, \underbrace{\omega^5}_{N}, \underbrace{-\frac{0}{2}}_{N}, 1^5)$	$\{13, 4, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 11$
(21) $(\underbrace{1-2\theta}_{N}, \underbrace{\bar{\omega}^5}_{N}, \underbrace{-\frac{0}{2}}_{N}, 1^5)$	$\{13, 4, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 11$
(22) $(\frac{0}{4}, 1^{11})$	$\{16, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$

更に,

$$U(v, j, k) := \frac{1}{\theta} \begin{bmatrix} \underbrace{0}_{C} & \underbrace{0}_{C} & \underbrace{0}_{C} \\ 1 & 1 & 1 \\ 1 & \omega & \bar{\omega} \\ 1 & \bar{\omega} & \omega \end{bmatrix} \begin{matrix} C \\ C \\ C \\ C \end{matrix} \quad \text{とおき, 行列の直和}$$

$$\xi := U(\infty, 6, 7) \oplus \overline{U(8, 10, 2)} \oplus \overline{U(1, 9, 5)} \oplus U(0, 4, 3)$$

と作ればこれは 12 次ユニタリ行列であるが,  $\mathcal{L}$  を保つ事を check される。すなわち,  $\xi \in \text{Aut } \mathcal{L} = \widetilde{\mathcal{L}}$ 。

上の  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  の  $M$ -orbit の代表元等と  $\xi$  で動かしてみることにより,  $\langle \xi, M \rangle$  は  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  とそれぞれ transitive となる事が示される。特に,  $G = \widetilde{\mathcal{L}} / \langle -\omega I \rangle$  は,  $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$  と transitive であり, 前に注意した如く,  $\mathcal{L}_3$  の実  $\{\pm p(\mathbb{R}_2)\}$  の  $G$  における

stabilizer は  $\overline{M} = D_0 / \langle \omega I \rangle \rtimes P \cong 3^5 \rtimes M_{11}$  ( $3^5$  は order  $3^5$  の elementary abelian 3-group を表わす. 以後  $\overline{M}$  と書く.) であり,

$|\overline{L}_3| = |\mathcal{I}| = 2^9 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13$  かつ,  $G$  の order は,

$$|G| = |\overline{L}_3| \cdot |\overline{M}| = (2^9 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13) \cdot 3^5 \times 11 \cdot 10 \cdot 9 \cdot 8 = 2^{13} \cdot 3^7 \cdot 5^2 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 13$$

と定まる。(この  $\overline{L}_3$  は符号を無視した新たな  $\overline{L}_3$  である.)

更に,  $\text{Aut } \mathcal{L}$  における  $X = (\frac{6}{3}, \frac{2}{3}, 0^6) \in \mathcal{L}_2$  の stabilizer が,  $D_1 = \{d(C) \mid C \text{ は } 6, 7 \text{ support と含まぬ } C \text{ の元}\}$ ,

$P_{6,7} = \{ \sigma \in P \mid \sigma^6 = 6, \sigma^7 = 7 \}$  等と含むことから,  $G$  における

$X$  の stabilizer  $G_X$  の  $\overline{L}_2$  ( $196560/6 = |\overline{L}_2|$ ) への作用における orbit が求られ, その size は 1, 891, 1980, 2816, 6336, 20736. ( $X \in \mathcal{L}_2$  に対する通常の内積  $X \cdot Y$  の値が

$\langle \omega \rangle 18, \langle \omega \rangle 9, \langle \omega \rangle 6, \langle \omega \rangle 3, 0$  の 0 を除く (各々の値に対する  $Y \in \mathcal{L}_2$

の全体に  $G_X$  は transitive.  $X \cdot Y = 0$  なる  $Y \in \mathcal{L}_2$  は 2つの  $G_X$ -orbit に

分かれる。) この値から,  $(G, \overline{L}_2)$  が primitive であることが

わかる。(従って,  $G_X$  は  $G$  の maximal group である!)

また, この事実と  $\text{Aut } \mathcal{L}$  の元の固有値に対する簡単な注意により, あとは標準的な群論で  $G$  の simplicity が示される。

注意: 上の  $X \in \overline{L}_2$  の stabilizer  $G_X \cong U_5(2)$  である事は

$G$  の maximal local subgroup の分類が終了した段階でわかる。多分, もっと explicit に同型を確認できるであろう。



#### § 4 Some 3-local in $G$

この § では 前 § の準備だけから見つかる Maximal 3-local group の候補 (実際に maximal group になる) を記述する。

前 § で見た通り, 対応  $C \mapsto d(C)$  を通じて ternary Golay Code  $C$  と  $\text{Aut } L$  の subgroup  $D$  は  $\text{Aut } C$  の permutation part  $P$  の作用も込めて同型であった。この  $P$ -orbit と  $C$  のこの表から  $\bar{D} = D / \langle \omega I \rangle \subseteq G$  は  $P$  の作用で 2 個の orbits に分解する。代表元は  $d(C_i) = \omega_i$  と  $d(C_0 + C_j) = \omega_i \omega_j$  の image である。| $G$ | より,  $\bar{D} \cdot P$  は  $G$  の 3-Sylow group と全か。  $\bar{D}$  の外側の元は  $\bar{M} = \bar{D} \cdot P$  で 2 つの共役類に分解し, 前 § の元系により  $\omega_i \omega_j$  とある  $\bar{M} - \bar{D}$  の元は fuse する。mod  $\langle -\omega \rangle$  での行列の trace を比べればこうして得られた 3 つの  $\langle \bar{D}, \bar{M} \rangle$ -class は fuse しえない。すなわち,  $G$  の order 3 の元は 3 つの共役類に分かれる。  $\omega_i, \omega_i \omega_j$  と全か共役類と  $C_A(3A), C_A(3B)$ , もうひとつと  $C_A(3C)$  と書 (時, 次が示せる)。

Lemma ([26] Prop. 1.5)  $G$  の  $\underbrace{3\text{-local group}}_{\text{maximal}} L$  に対して次のいずれかが成り立つ。

$$(1) L = N_G(A) \cong 2^2 \bar{V}, A = \langle A \cap C_A(3A) \rangle (\neq 1)$$

$$(2) L = N_G(A) \cong 2^2 \bar{V}, A^\# \subseteq C_A(3C)$$

以下 (1) の形の 3-local について述べる。  $A \subseteq \bar{D} \cdot P$  としてよいか。先の考察より  $A \subseteq \bar{D}$  とある。  $P$  の作用を考えるこ

とより  $\bar{\omega}_0 \in A$  としてよい。また  $|A| \geq 3^2$  ならば  $\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle \subseteq A$  としてよい。

$D \ni X$  に対して,  $X$  が axis 毎に fix する cross の全体を  $\Phi(X)$  と書く。例えば  $\Phi(D) = \{S\}$  であり, 前より,  $S$  は axis 毎に fix する  $\text{Aut } L = \bar{G}$  の subgroup は  $D \times \langle -I \rangle$  である。

簡単な計算で,  $\Phi(\langle \omega_a, \omega_0, \omega_1 \rangle) = \{S, D_1, D_2, D_3\}$  を示せる。  
 $\geq 2$  として,  $S'$  は standard cross, かつ  $D_1, D_2, D_3$  は次の cross である。

$$T_1 = \{x, 6, 7\}, T_2 = \{8, 10, 25\}, T_3 = \{1, 9, 5\}, T_4 = \{0, 4, 3\}$$

とすると,

$$D_1 = \left\{ \begin{array}{l} R(\sqrt[3]{T_1}, 0^1) \\ R(3, 3\omega, 3\bar{\omega}, 0^1) \\ R(3, 3\bar{\omega}, 3\omega, 0^1) \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$$D_2 = \left\{ \begin{array}{l} R(\sqrt[3]{T_2}, 0^1) \\ R(3, 3\omega, 3, 0^1) \\ R(3\omega, 3, 3, 0^1) \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$$D_3 = \left\{ \begin{array}{l} R(\sqrt[3]{T_3}, 0^1) \\ R(3, 3\bar{\omega}, 3, 0^1) \\ R(3\bar{\omega}, 3, 3, 0^1) \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$\geq 2$ ,  $\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle \not\subseteq A \subseteq D$  とすると,  $\exists \omega_i \in A (i \neq 0, 1)$

であり,  $\Phi(A) \subseteq \Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle) = \{S, D_1, D_2, D_3\}$  は明らか

だが  $\omega_i$  は  $D_1, D_2, D_3$  は axis 毎には fix しない。

よって  $\Phi(A) = \{S\}$  である。  $N_{\text{Aut } L}(A)$  は明らかに  $\Phi(A)$  に作用するから  $S$  を stabilize し、従って  $N_{\text{Aut } L}(A) \subseteq M$ .  $G = \text{Aut } L / \langle -\omega_a \rangle$  を考えれば  $N_G(A) \subseteq \bar{M}$  である。

従って (1) の形の maximal 3-local は  $N_G(\langle \bar{\omega}_0 \rangle)$ ,  $N_G(\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle)$  または  $N_G(\bar{D}) = \bar{M}$  のいずれかに共役でなければならぬ。

$N_G(\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle)$  の構造は、  $\Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle) = (S, D_1, D_2, D_3)$

への作用の核 (すなわち  $S$  を fix するから  $M$  に  $\lambda_3$ )  $\in M$  中ではと見ると、及び 4 変数  $\Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle)$  上に  $A_4$  が作用している事により定まると、  $3^{2+4} \rtimes Z_2(A_4 \times E_4)$ .  $Z_2$  と同型な群になる。

$N_G(\langle \bar{\omega}_0 \rangle)$  の構造は次の様に求められる。  $\omega_0 = (\bar{\omega}_0^6 \bar{\omega}_0^7)$  の固有値  $\omega$  に対する固有空間と  $L$  の共通部分である rank 6 の sublattice  $\Gamma = \{X \in L \mid X^{\omega_0} = \omega X\}$ , 更に  $\Gamma$  の mod  $\theta$  の reduction  $\bar{\Gamma} = \Gamma / \theta \Gamma = \{X + \theta \Gamma \mid X \in \Gamma\}$  を考える。  $\bar{\Gamma}$  は  $\mathbb{F}_3$  上 6 次元の space であるがここに  $L$  の二次形式  $\delta$  の  $\Gamma$  への制限が induce される二次形式  $\bar{\delta} : \bar{\delta}(X) = \frac{1}{2} \delta(X) \text{ mod } \theta$  ( $\delta(X)$  は even integer である。) を入れる。この二次形式  $\bar{\delta}$  は non-degenerate 及び negative type である事を示される。  $C_{\text{Aut } L}(\omega_0)$  は  $\bar{\Gamma}$  に作用し (ユニタリ行列ゆえ)  $\delta$  を従って  $\bar{\delta}$  を保つから、作用の核に属した部分は  $O^-(6, 3)$  の subgroup, 実はその交換子となる事がわかる。核は  $\langle \omega_0, \omega_a \rangle$  であることがわかり、これから  $C_G(\bar{\omega}_0) \cong Z_3 \cdot \text{P}\Omega^-(6, 3)$  となる。 ( $-I$  は  $O^-(6, 3)$  のスカラー行列になる。) また  $P$  は  $\omega_0$  を invariant

する元があるから,  $C_G(\bar{\omega}_0) \cong \mathbb{Z}_3 \cdot \text{P}\Omega(6, 3) \cdot \mathbb{Z}_2 \cong \mathbb{Z}_3 \cdot \text{U}_4(3) \cdot \mathbb{Z}_2$   
 (よ(知られた同型  $\text{P}\Omega(6, 3) \cong \text{U}_4(3)$ .)

### References

- [1] Bloom, D. M., The subgroups of  $\text{PSL}_3(8)$ , for odd  $8$ , Trans. Amer. Math. Soc., 127(1967) 150-178.
- [2] Butler, G., The maximal subgroups of the sporadic simple group of Held, J. Algebra 69 (1981) 67-81.
- [3] Butler, G., in [6]
- [4] Conway, J. H., A characterization of Leech's lattice, Inventiones Math. 7 (1969) 137-142.
- [5] Conway, J. H., Three lectures on exceptional groups, "Finite simple groups", Academic Press, London, 1971. chap. III, 215-247.
- [6] Cooperstein, B., Maximal subgroups of  $\text{G}_2(2^n)$ , J. Algebra, 70 (1981) 23-36.
- [7] Curtis, R. T., On subgroups of  $\cdot O$ , I Lattice stabilizers, II Local structure, J. Algebra 27(1973), J. Algebra 63(1980) 413-434.
- [8] Dickson, L. E., Linear Groups, Dover, New York, 1958.
- [9] Enright, G. M., Subgroups generated by transpositions in  $\text{F}_{22}$  and  $\text{F}_{23}$ , Comm. in Algebra, 6(8), 823-837 (1978).

- [10] Finkelstein, L., The maximal subgroups of Conway group  $C_3$  and McLaughlin's group, J. Algebra 25 (1973) 48-90.
- [11] Finkelstein, L., and Rudvalis, A., Maximal subgroups of Janko's simple groups of order 40, 232, 960, J. Algebra 30 (1974), 122-143.
- [12] Finkelstein, L., and Rudvalis, A., Maximal subgroups of the Hall-Janko-Wales group, J. Algebra 24 (1973), 486-493.
- [13] Hentley, R.W., Determination of ternary collineation group whose coefficients lie in  $GF(2^n)$ . Ann. of Math. 27 (1925) 140-158.
- [14] Janko, Z.A., A new finite simple group with abelian 2-Sylow subgroups and its characterization, J. Algebra 3 (1966) 147-186.
- [15] Lindsey, J. H., A correlation between  $PSU_4(3)$ , the Suzuki group and the Conway group, Trans. Amer. Math. Soc., 157 (1971) 189-204.
- [16] Maglovaras, S. S., The subgroup structure of the Higman-Sims group, Bull. Amer. Math. Soc., 77 (1971) 535-539.
- [17] Mitchell, H. H., Determination of the ordinary and modular ternary linear groups, Trans. Amer. Math. Soc., 12 (1911) 207-242.
- [18] Mitchell, H. H., The subgroups of the quaternary abelian linear groups, Trans. Amer. Math. Soc., 15 (1914) 379-396.
- [19] Mwene, B., On the subgroups of the group  $PSL_4(2^n)$ , J. Algebra 41 (1976) 79-107.
- [20] Petrov, N. and Tcheckerian, K., The maximal subgroups of  $R_2(4)$ ,

*J. Algebra* 76, 171-185 (1982)

[21] Suzuki, M., On a class of doubly transitive groups, *Ann. Math.* 75, 105-145 (1962).

[22] Tchakerian, K., The maximal subgroups of the Tits simple group  
*Comptes Rendus de l'Académie Bulgare des sciences* 34, N°12 (1981).

[23] Wilson, R. The Quaternionic lattice for  $2G_2(4)$  and its maximal subgroups, *J. Algebra* 77, 441-466 (1982)

[24] Wilson, R. The Complex Leech lattice and the maximal subgroups of  $Suz$ , to appear in *J. Algebra* (?)

[25] Wilson, R. personal communication

[26] Yoshiwara, S. 散在型鈴木厚純群の極大部分群について  
東大修士論文 1982

[27] Yoshiwara, S. to appear

[28] Yoshiwara, S. to appear